
友達と私

耶麻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友達と私

【Nコード】

N2574U

【作者名】

耶麻

【あらすじ】

私、笹原玲はれいだからと言って冷めてるって思われがち。実際には明るいほうだし第一、字が違う。そんな私が色々な友達や先輩と学園生活を送って行く!!

1（前書き）

楽しんでいただけるか不安です！
下手ですので気軽に読んでいただいたらいいと思います！

私は笹原玲。^{ささはられい} れいときいて、冷めてるっていつも思われるのだが冷めてはいない。大体字が違うし。勿論、それは周りの人も知っている。初対面の人にだけそう思われがちなのだ。私は誰でも相談がある人は相談に乗るし結構明るい方だ。誰とでも仲良くはしているつもり。

「玲……！聞いてよ……！」

っと嬉しそうな声をして話しかけてきたのは、友達の小村晴菜。^{こむら はるな} 一番、相談が多い人物。内容を聞かなくても、何を相談してきたのか分かる。恋愛。晴菜は今、恋をしている。その相手はサッカー部で有名な望月奏。^{もちつき せう} カッコいいが女子に無口なのが晴菜は好きらしい。正直言って私は話かけずらいタイプなんだよね。

「玲さ、今度の土曜日空いてる？」

晴菜がこういう事聞いてくるのはあまり珍しくない。だって二人で映画をしょっちゅう見に行ってるから。晴菜は家の手伝いをよくしているお金がある。まあ私もそれなりにはあるのはお小遣い制なのでお金が尽きる事はない。が、さすがに今月はやばい状態なのだ。

「空いてるけど映画ならパス」

私が言っていると晴菜は「違う違う！映画じゃないって！」っと手を横に振った。

こういう時は嫌な予感しかない。しかも、私の予感は結構あたるんだ。

「光輝が試合あるから絶対来いって」

ほら。私の嫌な予感^{ひんがし}は当たった。光輝とはサッカー部のキャプテン、氷室光輝^{ひむろみつあき}の事だ。小学校の時からこの二人は仲が良くてお互いの好きな人の情報を交換していた。私や晴菜は氷室の好きな人を知っているが私達以外は知らない。氷室はキャプテンになるくらいだからサッカーは上手い。プラス顔もそこそ良い。よって結構モテる。私には何故氷室がそんなにモテるのか不思議なのだが。友達としてはアリだが彼氏としてはナシ。話を戻して・・・何故この事がいやな予感かと言うと

「って事で玲！あんたもつい「却下」」

分かっただろうか？最後は私がさえぎったから分からないと思うが想像がつくだろう。晴菜は何かあると私に「ついてきて」つと云うのだ。そして、私の大事な休日^{コイツ}が削られていくんだよ・・・。

「いいじゃん！玲、どうせ暇でしょ？」

「暇なんかじゃないの。大事な時間なの。はい。他の人当たって！！」

私は晴菜が「待つてよー！」つと云っているのを無視し教室に入っていた。ちなみに、私と晴菜は違うクラスで晴菜は望月と一緒に。私は氷室と一緒に^{コイツ}なのだ。そして、氷室も厄介なのだ。

「玲！何してた？」

「いつもと同じく晴菜の相手だよ。それよりお前モテてるって自覚あんの？」

氷室が厄介なのは、自分がモテてるって自覚なく私に話しかけてく

る事だ。まあこのクラスで一番、仲が良いのは氷室なんだが、私を呼ぶときが問題なのだ。『玲〜!』って言ってるだろ?そこが問題。氷室が呼ぶたびに女子から(氷室狙い)の視線が怖いのだ。

「モテる?誰が?」

「・・・いや。なんでもないよ。それより氷室、晴菜に余計な事言っただでしょ!？」

「余計って・・・試合の事?言っただよ。あ、お前も来るのか?」

「そーじゃない!次、試合の事言う時は私を誘うなって言っというて!」

つといつもこんな調子で言い合っている。ちなみに頭の良さで言うとうと一番が晴菜。二番が望月。三番目が私。四番目が氷室の順だ。それより氷室の好きな人、気になる?そのうち出てくるよ。何もなく授業が終わり、放課後になった。本当に何もなかったよ。何かあるかな〜とは思っていたのに。

「玲!ちよつと待って!」

あ、今のは唯一クラスで演劇部に入ってる加藤恭輔^{かとうきょうすけ}。ジャンルで分けると氷室のジャンルに入る。そんなにモテてはないけど。そして、幼なじみ。

「お前今、ちよつと失礼な事考えてたろ」

「・・・」

「黙秘!？」

何故だか恭輔には人の思っている事が分かるらしい。だから、ばれた時のしらばつくれ方は黙秘が無視だ。私は普段、突っ込みなのだが恭輔といると何故かボケに回ってしまう。それほど恭輔の突っ込

みは鋭いのだ。

「失礼しまーす。部長、ちょっと遅れま「遅い!!」」

「だから、今遅れましたって言ったじゃないですか」

この人が我等、演劇部部长、ながたもしゅんや永友俊哉さんだ。俊哉さんは先輩とは思えないのでさん付けなのだ。そして俊哉さんは今、彼女募集中である。先週、振られたらしい。

「おい！全部もれてるぞ！」

「あ、もれてました？それよりそんなに遅くなんだから睨まないでくださいよ。俊哉さんが睨むとそれなりに怖いんですから。」

ちよつと変に思ったかもしれないが、今喋ったのは私である。何故か、この演劇部にくるとキャラが崩壊するのだ。キャラが崩壊するのは私だけではないので安心を。

「何を安心するんだよ」

「また心読んだな！！読むな！」

「知るか。読めちゃうんだよ！そんな事より部長。今日いったい何するんですか？」

俊哉さんがメンドくさそうに答えた。

「えーっと、役決め。7月にある発表会の」

俊哉さんが部長になったのはジャンケンで負けたからである。だから、二年生の俊哉さんが部長になっているのである。

「俊哉さん。役決めってまだ何するか決めてないよ」

「だから、それを含めて決めんだけど」

そこですかさず、恭輔が「テキストだな！」と突っ込みを入れる。本当に恭輔の突っ込みは鋭い。それから、何とか劇を決めた。私は裏方が良いので裏方に回る事にした。ちなみにやる劇はシンデレラ。

5分後

「部長！全員決まりましたよ。丁度、チャイムも鳴りましたし帰りましょうよ」

「そうだな。よし、解散！」

マジで適当な終わり方……。そう思いつつ私は恭輔と一緒に教室を出たのであった。ちなみに私達は家が隣です。

1（後書き）

素人ですのでバンバンダメだしてください！

あと、感想とかも良ければください！

「部長、あいかわらずテキトーだったな」

「俊哉さんはああいう人なの。」

今、私達は帰りの道を歩いている。帰りはいつも、学校のグチとか先輩のグチとかお互いに言い合っている。基本的に先生と俊哉さんのグチだが。そんな事を言い合っているとあつという間に家についた。

「お母さんただいま。恭輔。今日も家で食べるの？」

「ああ。おばさんのご飯美味しいし、俺んちまだ帰ってきていないだろうし」

恭輔のお母さんとお父さんは共働きで、昔からの付き合いのお母さんが色々面倒を見ている。けど、恭輔のお母さん達は色んな所に連れて行ってくれる。だからおあいこ？なのだ。

「あ、恭輔君お帰り。今日のご飯は餃子よ！」

「うわぁ〜楽しみ！」

おいおい！待て待て！お母さん今すんなりと私の事無視した！？何それ！自分の子供なのに恭輔の方を優先したよね、今！？てか、恭輔何その目！「まあまあ落ち着けよ」的な目！？逆にむかつくよ！　　っと内心思っているんだけどそれを口にはできない。口にしたらお母さんが……。ここから先はご想像にお任せ。自分で考えるの嫌だから。

「恭輔！ゲームしよーよ。ゲーム。今日も〇鉄！」

「好きだよな〜それ。いいぞ！勝負だ！！」

それから、1時間くらいゲームをしてから晩ご飯を食べた。私の家には中2の弟がいる。この人は何故か恭輔に対して態度が酷い。なんていうか、悪口とか普通に言う。（恭輔の）何でだろう？仲良くしてほしいのに。

「恭輔、お風呂。大樹〜恭輔と一緒に風呂入りなさい！」
「無理！！」

即答！？即答は酷いと思うよ……。恭輔って以外にこういうの傷つくタイプだし。あ、ほら。落ち込んでる。よく漫画で体の後ろにどよ〜んってやつがあるでしょ？あれが見えてくるぐらい。

「じゃあ恭輔が出たあ「却下！」」

またもや即答。即答って言うか私が言い終わる前に言っちゃったね。それで、恭輔がもつと落ち込んだよ……。何でこの子はそんなに恭輔を嫌ってるのかな？小さい頃は仲良かったのに。本当に何したんだろ？

「じゃあもう、私の後でいい？」

「うん！！」

何この反応の差。恭輔の時は冷めた目だったのに私の時はむっちゃ嬉しそうな目。そんなに恭輔の事が嫌いなのかな？この人は。うーん……。わかんない。その反応を見て恭輔はさらに落ち込んだし……。

「恭輔。早く入ってきて！」

「お、おお・・・」

さっきまでの元気はどこへやら。恭輔は落ち込みながらも風呂場へ向かった。さてと、まずしないといけないのは・・・

「大樹！恭輔にあんな態度とつちやダメでしょ！あれでもお兄ちゃんだよ！？」

風呂場から「あれでもってなんだ！！あれでもって！」っと凄く突っ込まれたがそこは無視しよう。今は大樹を怒るのに集中しないといけない。（つと言っているが本心はめんどくさいだけ）。大樹はしょんぼりした顔になって「だって・・・」と何か言い始めた。

「あいつ嫌いなんだもん。」

だからってねえ・・・キツク言いすぎだよ。いくら恭輔の心が強いからってあれはダメだよ。

「嫌いでもあんな言い方しちやダメでしょ？可愛そうじゃない。きつく接しちやダメだよ？分かった？」

大樹はしょんぼりしながら、イヤみただけど「はい・・・」っと返事をした。うん。これなら安心安心。それより、恭輔は遅い！どれだけ長いんだ恭輔のお風呂は！！私が呼びに行こうと風呂場へむかったその時、ドアがガラツと開いた。

「あがつてたんだ。・・・上の服着たら？大樹に怒られるよ？」

「だってねえーんだもん。いつもの奴貸して」

私は「いつものところにあるから自分でとって」っといって着替えをとりに行った。え？今のは誰かって？勿論、恭輔だよ。いつものとはお父さんのパジャマの事。最近では恭輔がお風呂に入っただけのまま

寝ちゃうからパジャマを貸してあげている。人んちなのに遠慮もないんだよ……。まあお母さんが良いって言うてるからいいんだけど。それと、寝ている部屋は違うよ？いくら恭輔でもさすがに同じ部屋はイヤだもん。後、恭輔に恋愛感情はないよ。恭輔、好きな人いるしね。だから仲の良い幼馴染だよ。

それから、全員お風呂に入って寝る準備がされていた。はずなんだけど……

「大樹！そこはお姉ちゃんのベット！大樹は上でしようが！」

「だって上暑い。後、恭輔が上で寝るって言ったし」

暫く沈黙。そりやそうだ。意味が分からないもん。理由が聞きたいという大樹が理由を説明しだした。何か、恭輔は寒かったらしく、毛布もいやなので大樹のベットに寝るらしい。ちなみに、私と大樹は部屋が一緒なので当然二段ベット。私が下、大樹が上となっている。

「えーじゃあお姉ちゃんに床で寝ろっていうの！？」

「違うよ。姉ちゃんもここで一緒に寝よーよ」

大樹はそういいながら片手をベットの上でポンポンさせた。どうしようかな…ま、弟だしいつか！私はそう思いながら大樹の横に座った。意外と狭いなあ…

「大樹、もう寝るよ。暑くない？」

「うん。大丈夫だよ。じゃあお休みお姉ちゃん。」

そついうと私はドアの方を、大樹は私の背中を見るようにして眠った。

目を開けるとカーテン越しに光が降り注いだ。なんていうか、あっさり寝れた。

まだ眠い目をこすりながら階段を降りていった。結構早い時間なのでお母さん達はまだおきてこない。

それから2時間くらいゆっくりすると続々と起きてきた。今日私は日直だから早く出ないといけない。これだから日直って嫌いなんだよな。そう思いながら家を出て学校に向かった。さすがに早い時間なので部活以外の人はまだ来ていなかった。なんとというか、そんな事はめったにないのでシーンとした教室が少しさびしく思えた。

日直の仕事を終えて教室に戻ると、ほとんど人が来ていて元の賑やかなクラスに戻っていた。教室に入ろうとした時、もの凄い元気な声で（しかも大声で）誰かが私を呼んだ。まあ振り向かないでも誰かは分かったけどね。

「何よ晴菜。また良いことでもあったの？」

つと言いなから晴菜の方を向くと、嬉しそうだけど何だか嬉しすぎて困っている顔で勢いよく私に飛び付いてきた。私は後ろによろけ、倒れそうになったけどとつさに近くにあった壁に凭れ掛かった。流石の私も、晴菜がこんなに動揺している所を見るのは久しぶりだ。

「どうしたの？何でそんなに動揺してる訳？」

私が聞くと晴菜は混乱しながらも少しずつ整理して話すようにゆっくりと事情を説明した。

2（後書き）

今回は主に恭輔と玲の話でした。

私的には幼馴染ってそこまでの関係なのかな？っと思いつつも書いておりました。

今回は晴菜の混乱の原因が明らかになると思います。

でわ、また次回も見てください！

更新が遅くなるかもしれません。

3 (前書き)

今回は晴菜視点です

（晴菜視点）

きゃあああああああ！！！！

これは喜びの声だよ？私、小村晴菜はついに！！大好きな望月君をデートに誘う事に成功しました！！

もう、心の中は喜びでいっぱいだよ

あ、でもなんか、緊張してきたかも・・・

私の緊張した顔は困った顔に見えるらしい。玲にも「何で今困ってるような顔してるの？」って言われたしね。

玲は私の親友だと私は思ってる。玲がどうかは知らないけど。玲は第一印象と今の印象ではぜんぜん違う。最初はクールでかつこよくて、仲良くなれなそうだなーとか思ってたんだけど実際話してみると、明るいし、誰でも友達は出来そうだった。それでも玲にはあんまり友達が出来ない。何でだろ？

「で、望月をデートに誘う事に成功したんだよね？良かったじゃん！それで私にはそれだけなんでしょ？じゃあ私教室行くよ？デート頑張ってるね」

つといて教室に入っていく。あ、逃げてる！絶対逃げてる！私は玲の腕をがっしりと掴み笑顔で言った。

「だからね、二人じゃ恥ずかしいから玲も誰か誘ってきて！誰もい

なかつたら私が呼ぶから！」

「嫌！！何でデートに付き合わなきゃいけないの！？頭おかしい！」

やっぱり乗ってくれない！こうなったら奥の手を使うしか・・・
この手ちよつとせこいけど

「玲が好きなチヨコパフェ奢るから！」

そういつた瞬間例の動きがピタリと止まった。あゝやっぱり食いついた。玲はチヨコパフェ大好きという外見からは予想も出来ない甘党。だから何かお願いする時は必ずチヨコパフェという名前を出すとたいてい付いて来てくれる。

「・・・行くけどその場で奢ってね」

「はいはい。で、玲の相手は？」

そこが重要なよ！男女4人だったらダブルデートに見えるでしょ？

「うゝん・・・特に誘う人はいないかな。周りは好きな子いる奴ばっかだし。」

「じゃあ私が誘っておくよ。話し合う人が良い？」

「どっちでも」

はあゝ本当に恋愛に興味ないよねゝ玲って。私は玲と別れた後、知り合いの男子に声をかけてみた。一応、玲が好きな人を探して。あ、そうだ！光輝にきこつと。光輝なら男友達いっぱいいるしね。そう
呟きながら光輝と玲の教室に来た。

「光輝ゝちよつと来てゝ」

光輝は結構モデルらしいんだけど私と光輝は仲が良いつて皆知ってるから睨まれたりしない。何か玲は睨まれるらしいんだけど。光輝はモテてるって自覚してないから玲が可愛そう・・・

「どうした？」

「ちよつとき、光輝の友達で玲の事好きな人っている？」

「うんいる。ちよつと待ってて」

あつさり見つかったな。ん？どんな人だろ？玲が好きそうな人ならしいけどな

「コイツコイツ。はい。自己紹介して」

「コイツつて言うな！あつはじめまして。かつらぎけいた桂木圭太です。サッカー部に入ってます」

「・・・あ！王子だ！」

「え？」

しまった！思わず口に出してしまった・・・。桂木君は私のクラスで人気上昇中の注目人物。それで、うちのクラスでのあだ名は何でか『王子』になってるの。それにしても王子が玲の事が好きとは・・・面白い事になりそう！

「なんでもない。じゃあ本題に入るね。今週の土曜日、玲とデートしてほしいの」

「えー!!」

そついった瞬間、桂木君の顔が真っ赤になった。

「あ、省きすぎたかな？実はこういう事なんだけど・・・」

それから桂木君は顔を真っ赤にしながら聞いていた。

「って訳なんだけどどうかな？来てくれたら嬉しいんだけど・・・」
「良い話じゃん！行けよ圭太！」

「え、う、うん。で、でも俺が言って迷惑じゃないかな・・・？」
「大丈夫！玲は遊べればいいから。後、玲の前では冷静を装える？
って無理だよな」

「うん。無理だと思う・・・頑張ってみるけど。えっと服は普通の
感じでいいんだよね？」

つとなんだかんだ言っているうちに休み時間が終わった。あゝ桂木
君と玲に何か展開があるかな

あ、そ、そう言えば望月君にこの事言わないと・・・き、緊張しな
い。落ち着いて落ち着いて！

よし！がんばるぞ！

「あ、あの望月君。ど、土曜日の事なんだけど、玲と桂木君も誘っ
ていいかな？」

「圭太・・・？あ、うんいいよ。あ、えっと・・・その土曜日9時
からでもいいかな？」

「あ、うん。じゃ、じゃあ玲達に伝えとくね。じゃ、じゃあばいば
い」

「あ、うん。ばいばい」

き、緊張した〜！！も、望月君は緊張しないのかな？

くくクラスの人達目線くく

「あ、望月君と小村さんが話してる」

「なんていうかあの二人って」
「初々しい」

4（前書き）

今回は桂木君が登場します。

後はダブルデートもします。

「ふわぁ〜眠い・・・皆休みの起きるの早いんじゃない？」

今私は、駅ホームにいる。朝7時30分に電話で晴菜に起こされて眠いまま駅のホームにいる。晴菜は元々これくらいに起きてるんだろうけど私にはもの凄い早いんだよ・・・私は基本、休みの日の前は徹夜だからね。さすがに昨日はしなつかたけどそれでも体がついてかない・・・そんな事を考えてるとむこうから晴菜が走ってきた。あ、望月達も一緒だ。

「玲〜！おはよ〜」

「おはよつてスカート？気合入ってるね〜」

「う、うるさいなぁ〜！玲は短パン？そっかスカート持ってたっけ？貸したのに」

「いや、これでいいよ。どうせ私は付き添いだし」

まあこんな会話してたんだけど、さすがに後ろの二人見たら晴菜は黙った。ま、主に望月を見てただけ。

「望月と桂木君おはよ。あ、望月って呼び捨てで呼んでもいいのかな？」

「うん。望月でいいよ。それと圭太の事も桂木でいいよ」

「それ望月が勝手に決めていいの？えつといいの？桂木君」

望月って意外と普通の男子かも。てか今、普通に笑ったよ？私はそう思いながら桂木君に目をむけた。

「あ、うん。」

「そついえば話すの初めてかもね。私の事知ってる？笹原玲つて言います。どうせ氷室と晴菜に無理やり押し付けられたんでしょ？ゴメンね」

「あ、違う違う！俺が行きたいって言っただけだ！だからその・・・無理やりじゃないよ！」

何か一生懸命、違うって言ってる桂木君を見ると面白くなってきて思わず笑ってしまった。

「あ、ゴメン変な事言つて！」

「あはは。違うよ。何か面白いな〜って思っただけだよ。」

「え？面白い？俺が？」

「うん。面白いよ。あ、そろそろ晴菜達の間に入ってあげようよ」

「あーうん。おい奏！小村さん！そろそろ電車のろう」

二人はぎこちなくうなずた。本当、二人ってお互い好きなんだろうな。ちゃんと話せる日は来るのかな？

「桂木君。私達あっち行こつか。晴菜ちよつと・・・」

私は晴菜の耳元で望月と電車の中で何か話さないつと云っておいた。この事を意識させておかないと晴菜絶対に黙るから。多分、桂木君も望月にそついったんだろうな。私と桂木君は晴菜達が見えるけど会話は聞こえない所に来て座った。

「望月に喋れよつて言っただの？」

「うん。あいつ絶対黙ると思うから」

「あ、一緒だ。あの二人は似たもの同士だね」

「気が合いそつで良かった。小村さんなら奏の事を分かつてあげれると思う」

桂木君が言ったその言葉は私と同じだった。望月君なら晴菜を幸せにできる。分かってあげてくれる。私達はどれだけ友達思いなんだろう？私は誰にも気づかれずに少し笑った。

「そうだね。あ、着いた。降りよつか。晴菜↓降りるよ」

それから4人で色々回ってから別々で行動する事になった。4人で回っている時も晴菜と望月はソワソワしていて私達がいないと喋ろうとしなかった。大丈夫かな？私達がいなくて。でも桂木君が二人にさせようって言うてるからいいか。

「じゃあどこ回る？あ、お昼まだだからお昼にする？」

「うん。あ、俺買ってくるよ。何がいい？」

私はあれこれ言って桂木君を待つ事にした。しばらくして桂木君が戻ってきた。

「はい。これ笹原さんの分」

「ありがと。桂木君。ハイこれ」

私は桂木君がご飯を買いに行ってくれてる間にお礼のキーホルダーを買っておいた。

「お、俺に？」

「うん。迷惑だったかな？」

「いや、その・・・」

「どうしたの？」

「その、笹原さんに先越されたな」と

そう言いながら桂木君はそつと手を出してきた。その上には可愛い犬のキーホルダーが乗せてあった。それを見て桂木君を見ると恥ずかしそうに笑った。なんだかそれを見て私も嬉しくなって笑った。

「ありがと。さ、食べよ」

「うん。」

座ってご飯を食べようとした時に桂木君の携帯がなった。それを見た桂木君は驚いた顔をしていきなりキョロキョロしだした。どうしたのと聞くとなんでもないトイレに行つて来るから先に食べといつと言つてトイレに行つてしまった。どうしたんだろ？ま、先に食べてよつと

桂木君はその後しばらくして帰ってきた。それから私の顔を見たり携帯を見たりそれを交互に何回も見ていた。

「あ、あのさ・・・め、メアド交換しない？」

「メアド？いいよ。ついでに電話番号も交換しておこうよ！」

それから桂木君はホツとした様に肩の力が抜けた。そんなにメアドを聞くのに緊張したのかな・・・？そう思うと自然に笑が込み上げて来た。それを見て桂木君も恥ずかしそうに笑ってご飯を食べ始めた。

その頃その様子を見ていた人達は・・・

「ほら！やっぱあの二人いいいんきじゃん！！告つてもよくね？」

「ダメだよ！つか知り合った日に告られても困るだけだよ？本当そういう所には鈍感だよね」

「お前が鋭過ぎるんだよ！！あ！しっ！玲がこっち来る！」

「声がでかい！！」

「静かに！！」

男が女の口を手でふさぎ声を潜めた。玲は首をかしげまた、圭太の方へ戻っていった。男の名は光輝。女の名は奈菜。光輝は奈菜と付き合っているがこの事は親しい友人しか知らない。奈菜とは室星奈菜。光輝の彼女であり玲と晴菜の友達である。この二人は自分達もデートと言って玲と圭太のデートを観察しているのだ。最初は二人とも晴菜と奏のデートを観察するつもりだった。が、玲と圭太がいまいんきだったのでそっちに変更する事にしたのだ。さっき、圭

太が慌てたのは光輝がメールをしたから。その内容とは『玲にメアドを聞け！！後トイレの前に来い！』と言う内容だ。それで慌てて圭太がかけつけて来てあれこれ説明した。

「あ、圭太の奴完璧に俺らの存在忘れてるわ」

「へーあの桂木君が？どんだけ玲の事好きなんだろう？玲のあの笑顔は確かに特別な人に向けてる笑顔っぽい。本人は気づいてないから桂木君が気の毒だけど」

そう言つて二人で苦笑した。玲は人の恋とかには鋭いのだが自分の事になると超鈍感なのだ。今二人が思っている事は『圭太（桂木君）頑張れ』。

その頃玲達は・・・

「笹原さんどうしたの？」

「うつん、なんでもない」

今、聞き覚えのある声が聞こえた気がした。が、周りを見渡しても知っている人はおらず自分の空耳と思う事にした。それにしても桂木君は面白い。表情がコロコロ変わる。桂木君の表情を見ると私までそれにつられてしまいそうだ。

「そろそろ回りにいこっか！！笹原さんどこ行きたい？」

「んーそうだなー・・・あ！あれ乗りにいこっか！」

こんなふう to 遊んでいると集合時間があつという間に来た。集合の場所に行くと晴菜と望月が仲良く楽しそうに話していた。お！上手くいったんだ！！良かった！

「あの二人上手くいったみたいだね。うん．．．行っても良いのかな？」

「わかんないな．．．と、とりあえず行かないと怒られそうな気がする」

「何で？」

「え？だってもの凄い睨んでるよ？小村さんが」

そう言われて晴菜の方を見るともの凄い顔で睨んでいた。うつお．．こわ！！確に行かないと怒られる程度ではすまないかも．．．と、とにかく行こう！そう桂木君に言って晴菜達の方に行った。

「晴菜！楽しそうだねえ！今からどこ行くの？もう夕方だけど」
「そうだな．．．どっか行こうとも思ってたけどもう遅いし帰る？」

あ．．．楽しそうって所は否定しないんだ。何か進化した．．．？
そう思いながらもなんとなく後ろを振り向いた。っとそこで目に入ってきたのはよく知った顔だった。

「氷室！奈菜！！」

「あ、ヤベ！見つかつちゃった！」

「ほら．．．だから物陰行こうって言ったじゃん！」

な、何でこの二人が．．．そう思っていると二人が近づいてきた。
この二人は私達を知る限りラブラブ。でも、皆にその事を話してないから仲のいい友達としか見られていない。

「何で二人がいるの？」

「え．．？理由はなしたら絶対怒るもん。だから言わな．．．い」

「それよりさ、帰ろうぜ！あ、玲！今日中に圭太にメール遅れよ」

何で知ってんだろ？わかんないな〜で、なんで桂木君は顔が真っ赤なんだろ？ちよつと面白くなってきた。

「桂木君顔真っ赤だよ？」

笑いながらそういう。すると桂木君は

「な！？なんでもない！！ほら！い、いこ！」

つと私と逆方向を向いて歩き出した。あはっ！照れてるのかな？耳まで真っ赤。少し笑いながら桂木君の後についていった。その一方残された人達はというと・・・

「何あれ！？玲がもの凄い笑ってるんだけど！！もしかして？」

「そう！そのもしかしてなんだけど本人気づいてないんだよね〜。どうしましょ」

女子二人は今までに見た事のない玲に興奮している。

「おい光輝。圭太が真っ赤・・・」

「うん。俺もビックリしてるよ。あの圭太が真っ赤・・・」

男子は見た事もない圭太の反応にただただ驚くばかり。その瞬間4人がまったく同じことを思った。『あの2人面白い』つと。そんな皆を置いて先に帰ってしまった二人はというと電車に乗っていた。お互いの体が触れ合うか触れ合わないかの距離。

（桂木君、まだ顔真っ赤）

つと玲は思っていた。圭太はまだ顔が真っ赤で玲とは逆方向を見て

いるので玲は圭太の顔がまったく見えない。その事に少しだけ不機嫌になりながらも真っ赤になっている桂木君の様子を見て気分は良かった。

5 (後書き)

圭太を書いててキャラが分かりにくくなりつつも可愛いと思っていました！

あれから私は氷室に言われたとおりに桂木君にメールを送った。内容は今日は楽しかったね！などの事。それからしばらくして返事が返ってきた。『うん。楽しかった。またみんなで行こう』その後私は何故か気分が良くてそのまま眠りに着いた。

〓月曜日〓

「あ、玲！おはよ〜」

「おはよ、笹原」

これは晴菜その横には勿論、望月がいる。すっかりカップルらしくなったな〜これでどこかに誘われる事もないだろう。そのまま私達は教室に向かい晴菜の教室の前で別れた。自分の教室に入ろうとした時春名たちの教室の方からわ〜っ！！と歓声があがった。多分カップル成立の報告をしたんだと思う。クラス公認になってよかった良かった〜！私はウキウキした気分で教室に入っていた。

「笹原さんおはよう」

「おはよ桂木君。って何でメガネかけてるの？」

私に話しかけてきた桂木君は昨日はしてなかった黒縁のメガネをしていた。黒縁のメガネ・・・桂木君がかけるといかにも頭がいい人だな。

「ああ、昨日はコンタクトだった。今日は部活がないからメガネ」
「ふ〜ん。桂木君はどっちでも似合うね。今日何でないの？」

つと聞くと桂木君も分からないらしく首を少し曲げた。あれ？部員も知らないんだ。じゃキャプテンなら知ってるかな？

「氷室！ちよっと」

「ん？何？」

「何で今日部活休みなわけ？」

「あ、そりゃ顧問の先生の都合。奥さんが出産？だったけ」

出産？あれ確かサッカー部の顧問って三浦先生じゃなかったっけ？先生に奥さんいる事は知ってたけど妊娠してたなんて知らなかった・・・。それで今日は部活が休みなのか。そっか！そう言えば噂はあったようななかったような・・・とりあえず三浦先生は数学の先生だからあの分かりにくい説明は今日は聞かなくて済む。

「じゃあさ、だれが数学の授業するの？もしかして・・・なし？」

「なわけあるか。新しい教師が来るみたいだぞ？しかもイケメン」

「最後の情報いらない！新しい教師か・・・説明分かりやすかったらいいな。じゃ私は自分の席に行くね。バイバイ、桂木君と氷室」

つと二人に言っただけ自分の席に着いた。その頃光輝と圭太はというと・・・

「本当に興味ないんだよね！玲は。そんでお前は玲と話すたびに赤面すんな」

そう光輝にいわれてから自分の顔が赤くなっている事に気づく。

「ゴメンゴメン。で、新しい教師ってそんなにイケメンなのか？」

「何だよ？心配か？大丈夫だよ。玲はイケメンだからってころっと落ちるような奴じゃない」

「なら良いんだが・・・なあ光輝、今日カラオケ行こうぜ。どうせ暇だろ？」

「あーわりい！今日は予定入ってるんだわ」

そういう光輝の顔が少し赤くなっているような気がした。俺はこの反応を見て直ぐに気づき小声で聞いた。

「もしかして室星さんとデートか？」

「そ！そういう事だから。また行こーぜ！じゃ休み時間な」

そう言っただけで自分の席に座ってしまった。俺の席は廊下側。俺が一番好きな席だ。残念ながら笹原さんとは反対側にきてしまったけど。今日の最初の授業は数学。俺の不得意科目だ。そう思いながら机の上に授業の準備をした。

くく玲くく

私はふと外を見た。手には読みかけの小説を持ち、もう片方の手でページをめくる。そして時々外を見る。外には誰もいないグラウンドが広がっている。私の席は窓側の一番後ろ。結構お気に入りの席。雨の日は嫌いだけど。

「おーい皆！席つけ！新しい先生を紹介する」

そっけないながらこのクラスの担任が入ってきた。その後ろからすらっと背の高い男の人が一緒に入ってきた。おお・・・騒がれるだけはある。結構イケメン。が、そんな事を思っただけでも興味が無い私は手に持っている本に目を落とす。それからしばらくして、自己紹介とか色んな事をして終わった頃に顔を上げ今から始まるうとしている授業の準備をした。あ、そういえば先生の名前聞いておくの

忘れてた。ま、いつか。そんな事を思いながら授業を聞いていた。

昼休みになって晴菜と一緒に弁当を食べようと晴菜のクラスに晴菜を呼びにいくと思わずため息が出そうになるくらい晴菜と望月がいちゃついている光景があった。二人ともそんなに積極的な方ではないのでべたべたはしていないが明らかにお互いを見詰め合っている。こんなんじゃないや昼ごはんはんに誘えないと諦め、自分の教室に戻って自分の席に座った。

本当はいつもならあの二人のそういう所にちよつといらつてくるんだけど今の私は気分がいいからそんな事では怒らない。何故気分がいいかと言うと、数学の問題の解説がもの凄いい分かりやすかったから。三浦先生には悪いけど正直言つて新しい先生の方が説明が分かりやすかった。どんな質問にも的確に分かりやすく説明してくれた。その後の授業も分かりにくい先生は出てこず今日はラッキーな一日だった。それで私は気分がいいのだ。

「玲！一人か？」

「一人だけ何？」

「一緒に食おうぜ」

そう言つて来たのは氷室。その後ろには桂木君がいた。二人はお弁当とどつかで買ったお茶を持って私の机の前に来た。ウキウキ気分の私はいいよと言つてしまった。その瞬間、無数の視線がこつちを向いた。わぁ・・・失敗した。そう思いながらも一度いいよと言つてしまったら断れない。かといって教室で食べるのもちよつとあれだから教室ではなく屋上で食べる事になった。

「なあ玲。何で今日はそんなご機嫌なわけ？」

そう聞いてきたのは氷室。私は氷室と桂木君の間に入って歩いていった。私のウキウキ気分気づいたのかそう聞いてきたのだ。気分のいい私は何故ご機嫌なのかを話すと途中で氷室がため息をついて私の話をさえぎった。

「本当お前って勉強好きだよな」

「んな訳あるか。勉強好きな奴がどこにいのよ。ただ分かりやすかったって話でしょーが」

「分かりやすかったってだけでそんなに機嫌がよくなんのかよ・・・」

氷室はまたため息をつき呆れたような表情を見せた。それと同時に桂木君がでもと話し始めた。

「遠藤先生の説明は分かりやすかった」

「ん？誰？遠藤先生って」

「はあ？お前、自己紹介してたじゃねーか！あ、お前本読んでたろ」
「うん。だって興味ないし。興味ないのに聞く必要ないし」

そう言って氷室に笑いかけるとまた氷室はため息をついた。

「本当、お前って特定の人しか興味ないよな。そんなんだからクラスで冷めてるって言われるんだよ。もっとその笑顔をクラスに振りまけ」

「そんな事言われてもなあ・・・何でか笑顔は信頼した人しか出来ないし。で、遠藤先生って新しい無駄にイケメな無駄メンの？」

「なんだよ無駄メンって！自分で作るなよ。そう新しい人」

「あ、ちなみに私から見ると氷室も無駄メンだぞ」

氷室はえ！？と驚いた声を上げてなにそれ！？と少々怒っている。

そんな姿を見て桂木君と私は爆笑。この後しばらく、氷室の機嫌が悪かったのは言うまでもない。

教室に帰ると無数の鋭い視線がこちら（主に私）を見てきたがそれをスルーして各自の席に戻った。そしてまたお気に入りの本を開いて読み始めようとした時、机の上にドンツと手がつかれた。その手をたどって上を見るとそこにはクラスの女子がほとんどいた。

「笹原さん。あなたどういうつもり？」

「は？何が？」

女子の皆さんはむっちゃ怖い顔で私を睨んだ。多分この人達は氷室と桂木君狙い。それで私をにらんでるんだ。

「あの二人と昼ご飯なんて・・・あなたもファンならちゃんとファンの掟を守りなさい！！」

なにそのファンの掟って。第一私ファンでも何でもないんですけど。

「何か言いなさい！」

「じゃあ言うけどファンの掟ってファンだけでしょ？守らないといけないのって。私はファンじゃない。友達。第一なんで友達とお昼食べるくらいで睨まれる訳？あの二人は皆の者って言いたいのか？」

私にファンの掟だと言った女子はそれは・・・っといって何も言わないため別の人が出てきていった。

「そうよ。皆の物。あの二人は皆の物なのよ」

この人は大声を上げたり焦ったりしない。つまり冷静で、多分この人がリーダーみたいなやつだろう。ちよつと手強そうな相手。

「皆の物？馬鹿じゃないの？あの二人は誰のものでもない。あの二人のものだけど。つまり私といほうがそれはあの二人の自由って事。分かった？」

「そ、そんなの屁理屈よ！！あんたみたいなのがあの二人にふさわしいわけがない。」

そこでちよつとイラツと来る。冷静なリーダーさんを慌てさせたのは嬉しかったけどふさわしくないってどういうこと・・・？その言葉に私はイラつく。

「何？ふさわしくないって。どうしてあなたにそういう事言われないいとけないのかな？」

「ふさわしくないでしょう。あなたみたいに虐待を受けて捨てられた子には」

その時私は聞いた事を後悔した。こんな形で私のいやな過去が思い出される事になるなんて。

「ねえ？ふさわしくないでしょう？」

「・・・どつかいて・・・」

「え？何？」

私はおもいつきり相手を睨みつけ言った。

「今すぐ私の前から消えて。さもないとあなたを殺す」

最後の言葉は冗談半分本気半分で言った。そのおかげで目の前にい

た女子達はさつと消え、どこかへ行った。『虐待を受けて捨てられた子』その言葉が私の脳に深く突き刺さった。それは思い出したくもない忌まわしい記憶。

6（後書き）

あれ？なんかちよつと重くなつてしまいました・・・

大丈夫でしょうか？（色々と）

「あんだなんか生まれてこなければよかったのよ！！」

そういつて女の人は小さな子供の頬を何回も何回も叩く。子供が声を上げるたびにうるさいといって叩いた。ろくにご飯をもらえず子供の体は痩せ細っていた。これが小さい頃の私。女の人が私のお母さん。毎日毎日お酒を飲み私に暴力を加え、役所の人が来ると私に嘘をつかせる。そんな生活が嫌で毎日昼は公園や建物内をウロウロしてた。そしてその生活が3年続いたある日、当時小学2年生だった私の前からお母さんは消えた。それから私は施設に預けられた。その時私の心を支配していたのは憎しみなどの感情ではなかった。

『捨てられた』

その事だけが私の心を支配していた。私は放課後になるまで誰とも一切話さなかった。氷室や桂木君とも。放課後になって教室に元氣な明るい声が響いた。

「玲々帰ろ・・・」

その声はクラスのただならぬ空気を感じたのか最後の方は小さい声で言った。さすがに一緒に帰る気はしない。私は晴菜の方に向かって歩いた。

「晴菜ゴメン。今日は一人で帰るわ」

そういうと晴菜の返事も聞かずにさっさと一人で帰ることにした。

〳〳晴菜視点〳〳

さつき玲が一人で帰ってしまった。私は玲の後を追う事ができなかった。玲の背中には来るな！とはつきり書いてあったから。それにしても、あの玲が怒ってた。それにクラスの空気も変。

私はどうしてこんな事になったか光輝に聞くことにした。光輝は言いにくそうにしたので人気がない屋上に桂木君と望月君と4人で行った。それから私に今日あった事を話してくれた。

「そう・・・そんな事があったんだ・・・」

「なあ晴菜。お前は知ってたのか？その事を」

こくと頷く。私は玲の過去を知っていた。あれは私と玲が小学校4年の時、突然私に自分の過去を話してくれた。話す前に玲は「晴菜を信頼して言う。誰にも言わないで」と言ってから話し始めた。玲の過去はあまりにも衝撃的だった。でも一番衝撃的だったのは話している本人がづらい話だといっていたのに泣かなかった事。目に涙すら浮かんではいなかった。辛い過去のはずなのに、嫌な過去のはずなのに。玲は我慢したんだ。私の前で、人前で泣いてはいけなさと我慢したんだ。泣きたい気持ちを抑えて、苦しい気持ちを抑えて私に話してくれた。

その話を聞いた私は約束をちゃんと守った。誰にも言わなかった。玲は親が来る行事の日は必ず誰かのお母さんとその誰かを羨ましそうに見ていた。それを見ていた私は心が痛んだ。自分の事の様に痛くて痛くて仕方なかった。

「玲は私にその話をした時、一滴も涙を流さなかった。それからも他人の前では涙や笑顔すら見せなくなつた。自分が信頼した特定の

人にしか笑顔を見せなかった。信頼した人でも涙は決して見せなかった。私は玲が泣いたところを一回も、一回も見た事がないんだ・
・」

そういつて私の頬に涙が流れた。私はいつもこうだ。玲の方が辛いのに、玲の方が悲しいのに涙が止まらない。自分は何にも辛くないのに悲しくないのに涙が止まらない。

「玲の方が辛いのに・・・」

「小村がそうやって笹原の事で泣いてくれるから笹原の涙が止まるのかもしれないな」

「多分そうだろうな。玲はうれしいと思うよ」

「笹原さんの分まで小村さんが泣いてあげればいいよ。それでも笹原さんが泣きたかったら俺達と小村さんが受け止めてあげればいいんじゃないかな？」

男3人に慰められてしまった・・・。そう思うと自然と涙が止まり代わりに笑が出てきた。

「3人ともありがとう。でも何だか光輝の言葉だけ心に響かなかった」

「ええ！？ヒドー!!」

そこで4人で笑った。どんな事もこの笑顔で、笑い声で弾き飛ばすように。

7（後書き）

何故か光輝の言葉だけが心に響かなかつた晴菜。

光輝は何やつてもしっくりきません・・・（笑）

『あんだなんか生まれてこなければよかったのよ!!』

その言葉が私の脳に刻み込まれている。昨日まではその事を思い出さずに済んでいた。でも昨日、あの事を言われてからその言葉が脳から離れなくなった。おかげで今日は寝不足だ。この教室の空気も重い。

私は今日ほど一日が長く感じた事はなかった。ようやくお昼になり屋上でご飯を食べようと教室を出た時だった。頭に強い刺激が走り視界がぼやけて私はバタリと倒れてしまった。意識がなくなる瞬間フワっという香りがした。

うつすら目を明けると白い天井が移った。多分ここは保健室だ。こんなとこめったに來ない。私が体を起こすと同時に保険の先生が来たところだった。

「あら？目が覚めたかしら。今、丁度最後の授業が終わったところよ」

「最後の授業・・・あの、どうしてここに？」

ここにいる原因が分からなかった。急に頭が痛くなってそれで視界がぼやけた事くらいしか覚えてない。

「たまたま、男の子達がゴミ箱で遊んでいたのよ。投げた瞬間、運悪くあなたに当たっちゃって訳よ。何でゴミ箱なんかで遊んでいたのかしら？分からないわ」

「ゴミ箱・・・」

衝撃の正体はそれだ。そのせいで視界がぼやけて倒れたんだ。

「それにしてもあなた、昨日寝れなかったでしょう？」

「はい・・・ちよつと考え事を」

「考え事にしてもちゃんと睡眠はとらないといけないわよ？ゴミ箱が当たって良かったわね。寝不足で倒れなくて済んだんだから」

そういつて保健室の先生はニツコリと笑った。私は喜んでいいのか分からず苦笑いしておく事にした。それから保健室の先生はむかえが来るまで大人しくしてる様に言っただけで保健室を出て行った。それにしてもゴミ箱・・・なんでゴミ箱なんかで遊んでのかな？第一ゴミ箱って・・・そう思うと何だかおかしくなつて一人で笑った。

それから私は疲れて眠ってしまった。

「・・・い・・・れい・・・玲！」

「・・・ん？あ、晴菜。おはよ？」

私の目の前にいたのは晴菜と望月と桂木君と氷室。何でいつものメンバーがそろつてるのかと思っただけだ。ここが保健室だと分かつて今までのことを思い出した。

「もう、夕方！むかえに来たら玲は寝てるし変な人はいるし」

「ん？変な人って誰？そんな人いたの？」

確か私が寝る前は保健室には誰もいなかったはず。晴菜と皆は顔を合わせてはあつたため息をつき玲は知らない方がいいと言われた。

「とにかく、玲ん家に帰るよ！ほら鞆持って」

「うん。あれ？これ私のじゃない」

「え！嘘！」

「ホントだつて。キーホルダーが付いてないし中身も違うよ。えつと、坂本樹君？誰それ？」

教科書には持ち主の名前が書いてあったが私にはそれが誰だか分からない。ていうかクラスにそんな人いたっけ？

「お前坂本しらねえーの！？超チャライ奴じゃん。この学校の先輩達のほとんどを抱いたって噂の！」

「そうなの？でも先輩だけでしょ？なら私関係ないじゃん。これ返しに行こうよ」

「・・・そうだな。行こう。笹原さんも坂本の持ってたって意味ないし。これだけの大人数で行ったら大丈夫だと思うよ」

桂木君のその一言に晴菜と望月は賛成し、氷室もしぶしぶ賛成した。それから先生に坂本樹の家の住所を聞き坂本の家に向かった。坂本の家はマンションで一人暮らしだと先生に聞いた。それから無事マンションに到着してドアの前まで来て、そこでインターホンを押した。すると中から声が聞こえてしばらくするとドアが開いた。

「はいはい、何ですか？」

「私の鞆返してください・・・あ！」

「花壇の所の女！」

「え？知り合い？」

正直、今というか一生会いたくない奴だった。昨日、晴菜に先に帰ると言っただけの涙を堪えきれず人があまり通らない花壇付近で泣

いていた。私は他人の前では絶対に泣かない。弱い、可愛そうと思われるから。そんなんだったら苦しくても泣かないで笑顔でいる方がよかった。でも人間限界ってあるでしょう？そういう時は影で泣く事にしていた。いつもそうしてきた。昨日もそうだった。なのに昨日は・・・

『お前泣いてんの？』

見られてしまった。泣いているところを他人に見られてしまった。私は涙を流したまま鞆を掴んで立ち去ろうとした。でもその行動はそいつが腕を掴んだ事で出来なかった。

『何で泣いてるのは知らないけど辛いんだろ？じゃあ今ここで泣いちゃえよ』

その優しい言葉が私の心に刺さったあの言葉を消してくれた。それから私は名前もどの学年も知らない奴の胸で初めて人前で泣いた。それから泣き止んで落ち着いた私は礼を言っつてその場を立ち去った。勿論、この事は誰にも言っつなと言っつてから。

「え？知り合いなの？というか何？花壇の女つて」

「え？それはだな・・・」

私は瞬時に坂本の来ているＴシャツを掴んでもの凄い小声で「言っつなよ」っただけ言っつと睨んだのが効果があつたのか一歩後ずさり「なんでもない」っつと私を見ながらむっつちや首を振つた。

「そんなに首振らなくていいし・・・。てか鞆返して」

「え？あれ？俺の？まさか・・・」

「そのまさかなの！早く！」

「玄関で待たすのはあれだから家の中入って待ってて」
「じゃ遠慮なく。皆入ろ」

私がそういうと私達のやり取りを見てポケットとしていた4人は慌てて坂本の部屋に入って来た。その慌てぶりが面白くてちよつと笑ったら晴菜に怒られてしまった。それでもしばらく笑は止まらなかったけど

「はい。中身これでいい？」

「うん．．うん。全部そろってる。てか人の持つて帰らないですよ」

「はい。すみません」

なんだ。意外と素直じゃん。そんな事を思っていたらふいに氷室が坂本にむかつて質問をした。

「なあお前って本当に坂本か？全然噂と違うくないか？」

「あゝそうだろうね。俺、年上に手、出してないし」

おお！衝撃の事実発覚！氷室や晴菜の目が大きく開いた。望月と桂木君は驚いてはいるけどそこまでのレベルじゃない。とにかく二人は完全に驚いてるって分かるレベル。まあそりゃこんなところで衝撃の事実聞かされたら驚くけどさそこまで驚かなくても良いんじゃないかな？逆に、その反応に坂本が驚いてるし

「そんなに俺チャラく見える？」

「うん。超チャラく見えるよ。まあ茶髪だとそうなるよね」

晴菜の発言に坂本を除く全員が頷いた。すると坂本は「そう？」とか言って首をかしげた。その前に私は一つ疑問が．．．

「ねえ坂本。坂本ってクラス一緒？私Aクラス」

「あ、じゃあ一緒だ。あれ？でも今日いた？」

「は？いたよ。昨日は？」

「俺、昨日休んだ。そっか俺あままり他人に興味ないからな」

「あ、それ私も。だからお互い気づかなかったんだ」

そんな話をしているともの凄いため息が聞こえて来たからパツと振り返ると私達を除く4人が呆れたように私達二人を交互に見てため息をついていた。

「お前らさ、もっと他人に興味を示せ。そうしたら変な噂とかなくなる」

「あれ？花壇の女もなんか噂あんの？」

「花壇の女って呼ぶな。玲、笹原玲」

「玲ね。で、玲の噂は何なの？」

「私の噂はもの凄い冷めたい人間で人を見下す」

そこまで言うとき坂本は「何それ」って笑い始めた。するとほかの4人も笑い始めて私はちよつとイラついてきた。ま、晴菜が「怒るのはやめて」って言ったから爆発はしなかったけど。

「なあ玲、メアド交換しようぜ、何か玲は面白い」

「はあ？何その面白いつて！ま、いいけどさ。ほい携帯出して」

私が携帯を出した瞬間、もの凄い怖い視線が来てるのは気のせいかな？ちなみに3つ感じるんだけど……。怖くて振り向けないんですけど。そんな事は知らず楽しそうに携帯を取り出す坂本。通信をやっていると「そうだ！」って坂本が突然話してきた。

「坂本じゃなくて樹ね。それと今度の休み一日中遊ぼう！」

「一日中？ いいけど。」

「マジで！」

「氷室は奈菜連れて。晴菜と望月は必ず。桂木君も来るよね？」

「「「「「え？」「」「」「」

その場にいる私以外の人が全員私を凝視した。あれ？ 変な事でも言っただけかな？

「うん。俺行く。氷室達も来いよ」

「お、おう。じゃあどこ行く？ 坂本はどこがいいんだよ？」

つとなんだかんだ話してるうちに午後6時になってしまっていた。最終的には男子だけで話し合っており女子はと言うと晴菜はなんかしたりしてたけど私は特にやる事もないので寝たら何故か望月と氷室に怒られた。私は何で怒ったのか分からずキョトンとして話を聞いていると望月が静かに「男は狼」と呟いた。その言葉の意味も分からず意味を聞いてもそれ以上教えてくれなかった。

8（後書き）

鈍感な玲でした（笑）

くく土曜日くく

「わぁ・・・眠い・・・だから何でこんな早くに集合なんだろう・・・」

現在朝の8時。この前は今日より30分も早かったからましだけど8時も結構早い・・・！しかも何で私は毎回、一番乗りなんだろう？もつと遅く来ればいいのかな？待つ間に寝そう。そんな事を思いながらあくびをしてると前から女子2人、男子4人がワイワイと話しながら歩いてきた。

「あゝ玲！おはよう相変わらず眠そうで」

そう言ってるのは晴菜と奈菜。その横で望月と氷室はうんうんと頷いている。

「玲も眠いよな！」

「・・・」

その横では樹が元気に良い、桂木君は半分寝ていて氷室に手を引っ張ってもらってる状態だ。そして後ろにはもう一人・・・え？もう一人？

「あ、そうそう。そこで恭輔と会ってな、一緒に遊ぶ事になった」
「恭輔く！絶対待ち伏せしてたな！！恭輔は今の時間帯寝てるでしょ！！」

恭輔は休みの日のこの時間帯は私と同じく爆睡しているはず。なに起きてるって事は待ち伏せしてると思えない。

「ちつばれたか。いいじゃねーか。最近お前遊んでくれねーし」

「恭輔がいるんだったら大樹が来ると思うよ」

私が言うと恭輔の顔から凄い勢いで血が引いていった。

「冗談よ冗談・・・あ、やっぱり冗談じゃなくなったわ」
「え？」

そういうと携帯を差し出した。そこには『大樹近づくな』っという一文と後ろの方からもの凄い勢いで走ってくる人が目に入った。まあ大樹なんだけど。私はソロリと恭輔の前からどいた。その瞬間、大樹のとび蹴りが恭輔に炸裂。恭輔は結構遠くまで飛んでいった。

「わあ・・・大樹。あんた手加減しなかったね？」

「だってあいつ嫌い。って痛！姉ちゃんこそ本気で叩かないでよ！」

「これは大樹が悪いからでしょうが！」

そのやり取りをぼかんと見ている桂木君と樹。他の4人は面識があるのでそんなに驚かないが。まあこの4人も初めての時は超驚いてたけど。

「またやってる・・・久しぶり。大樹君」

「あ。奈菜と晴菜と光輝と奏「さん付け」・・・さん」

「呼び捨てでいいよ。玲はほんと弟に厳しいな」

いや、当たり前だと思うけど？そんな顔をしていると後ろからもの凄い情けない声で助けが求められた。

「何情けない声だしてんのよ恭輔。大樹！恭輔から離れる！」

私はもう少しで恭輔を殴ろうとしている大樹に命じた。てかそこま
でやったらいくらなんでも恭輔気絶するよ！？大樹はもう少しで顔
に当たりそうな拳を舌打ちをしながら直した。ひとまず安心。

「じゃこの二人を紹介するね。二人とも同じクラスの桂木圭太君、
坂本樹君。」

「姉ちゃんと同じクラス？」

「そうだよ」

「ふ〜ん」

なにその意味ありげな返事。その返事に二人が首をかしげた。うん、
私も首を傾げたい。

「また天敵？」

そう言い出したのは晴菜。てか天敵って何？私が首をかしげると大
樹は面白そうに答えた。

「一人はね。えっとチャライ方。圭太は俺も好きだし」

「ほ〜良かったな圭太。気に入られたみたいだぞ。大樹に気に入ら
れれば後は本人の気持ちだけだ」

桂木君は訳のわからなさそうにキョトンとしたままだった。一方、
樹はと言うと天敵といわれた事にショックを受けたのか少し暗い・
・様な気がする。とりあえず大樹と恭輔をどうにかしないと遊びに
は行けない。集まってから10分は経ってるし。

「はいはい、二人とも帰って」

「え！俺、遊びに来たのに・・・」

「俺は姉ちゃんの側にいる」

「うん？帰らないといけないのに理由って必要？これ以上、何か行ったら本気で怒るぞ？」

そういつた瞬間、二人の顔から血が引き「イエ、ヒツヨウアリマセン・・・」と言って帰って言った。後ろから「こえ・・・」つとどこかのアホから聞こえて来たのは今は無視しよう。それから私は男子が提案した場所についていった。

「何でカラオケ？」

男子が連れて行ったのは集合場所から約5分ほど歩いたところにあるカラオケ。まあ答えは安いからなんだろうけど。最近カラオケ行つてなかったし私はそれでもいいんだけど。他の女子達は・・・

「いいじゃんカラオケ！！」

「ナイスチョイス！」

はい、ノリノリでした。もの凄いノリノリ

「じゃあ先入つといて。私、皆の分のジュース入れていくし」

「あ、俺も手伝うよ。そんなに多く笹原さん一人じゃ持てないですよ」

「桂木君ありがと。じゃあ後の皆は先に行つてていいよ」

「はいはい、早くて。先歌つておくから」

そついいながら私達二人を置いて指定された部屋に行った。途中で樹が押さえ込まれていたのは幻。幻。

それから私達二人はそれぞれに言われたドリンクをいれそれを指定された部屋に持っていった。ドアを開けた瞬間私は閉めたくなくなった。どうやら桂木君も同じのようだけど。樹を除くカップル2組は以上に距離が近かったからだ。

「・・・馬鹿？」

考えて考えて出た言葉はこれだけ。だってこの状況見て何と言えと？その言葉に2組は慌てながら離れた。

「イチヤつきたいのならもう2部屋用意するけど？」

「「「このままでいいです」「」」

つと4人同時に答えた。多分、皆でいる時はイチヤイチヤできるけどいざ2人つきりになったら恥ずかしいのだろう。そこらへんが私には分からない。それから約3時間私達は歌いまくった。そのほとんどが樹と氷室と奈菜が歌ってたけど。さて、現在、夕方4時。これからどうしよう？つという話になっている。

「いつそ誰かの家泊まる？」

そう奈菜が提案した。奈菜はお泊り会が大好き。何かあると誰かの家泊まる？といってくるのだ。

「誰の家に？」

晴菜がそう聞くと次々に俺は無理と男子は全滅した。残ったのは女子のみ。女子は基本的にいけるのだけれど男子がいるとなると・・・

「「私無理」」

つてなる訳ですよ。最後に残されたのは私の家。まあお母さんなら恭輔みたいなのがいっぱい増えるってだけで断りはしないと思う。一応、確認は取るけど。私はしばらく携帯に耳を当てそれからしばらくして携帯を切り皆にピースをした。それだけで分かるだろう。親からOKが出たのだ。それから各自で家に帰り泊まる用意をしてから私の家に集合という事になった。晩ご飯は食べずに。だから皆5時くらいに私の家に来た。

「…………おじゃまします…………」
「いらつしゃーい！わぁ……カッコいい子ばかりね！」

何故かお母さんのテンションはいつも以上に高くそんな事を言い出した。一人を除いては照れるっていうのに……。その一人はと言うと、

「おかあさんは綺麗ですねー！お姉さんと間違えるかと思いました！」

なんて事をいつている。お母さんと樹は世間話みたいにペラペラ喋っていて私達の事は完璧無視だ。まあそれもある二人の人物によってさえぎられたけど。

「あ、二人ともただいま。何恭介。また食べてくの？」
「おう！お前らは……泊まりか？」
「そう正解……勝手に○鉄すんな！」

私はそういつて恭輔のお尻を思いつき蹴ってやった。恭輔は痛そうだったけど自分のせい。私の大切なゲームを勝手にやるから悪いんだ。

「え？何で恭輔？」

氷室がいうと他の5人もうんうんと頷いている。

「幼馴染だからご飯食べに来てる」

事実を話したただけなのにえゝ？と疑いの目を向けられた。本当のことなのに・・・

「お母さん、お父さんは？」

「今日は帰って来ないわよ」邪魔って言ったから」

母はそう言いながらニツコリと笑った。お父さんゴメン・・・！お父さんへの謝罪の気持ちを心の中で考えながら私達はご飯を食べてお風呂に入って寝る準備をした。

「どこで寝るの？皆同じ部屋？」

「うん。めんどくさいから一番大きな部屋で寝るよ。お母さんが遅くまで起きてていいってさ」

「ふゝん了解」

そんなやり取りを晴菜としているとリビングの方から悲鳴？と言うか恭輔だけの悲鳴が聞こえた。まさかと思い部屋に春菜を置いてすぐさまリビングの方へ向かうとそこには倒れる恭輔と襲い掛かるうとする大樹目に入った。

「何やってんの！？」

「姉ちゃん！コイツが裸でウロチヨロと・・・！！」

大樹が指差した先には上半身裸で倒れている恭輔がいた。だから大樹の前では裸になるなといったのに……！！

私は直ぐに恭輔の側により、意識があるか確認すると大樹に向き直った。そして黒いオーラを引き出す。

「だからって本気で殴ったりしない！友達来てる時くらいは大人しくしなさい！！恭輔も恭輔よ！！この前その姿で大樹の前に出るなと言ったでしょう！！それでどうして出るの！馬鹿！これ以上騒ぎ起こしたら1週間家に入るの禁止ね！！分かった！？」

私がもの凄い、一気に喋ったから二人が反論する隙間はない。私が聞くと素直に「はい……」と言って一応落ち込んだ。私に説教されて反省しなかったらもつと凄い事になるしね。

「じゃあ大樹は部屋。恭輔は帰るかお父さんの部屋ね」

そついうと二人は迷わず自分（恭輔はお父さんの部屋）に入っていた。これで邪魔者達はいなくなった。……何か今の発言、自分で言ったんだけど酷いと思った……

「笹原さんどうしたの？」

「あ、桂木君。いや、何かね。ひどいこと思いすぎたかなって」

「笹原さんが？思うだけならいいんじゃない？言ってないんだし」

「そうかな？桂木君が言うならいつか。そついやどうしたの？」

何故、部屋にいるはずの桂木君がこんな所にいるのかが私は気になった。桂木君の話によるとじゃんけんで負けたからお茶を取りに来たらしい。それでリビングの前にいる私をみつけて話して来たらしい。

「お茶も入れたし、おやつも持ったしいこっか」
「うん」

私達二人はお茶とおやつを持ち皆のいる部屋に向かった。

9（後書き）

次は更新遅くなりそうです・・・

10（前書き）

お久しぶりの投稿！今回は短め

「ねえ桂木君。私今ここにいない方がいいと思ったんだけど違う場所に行つて話そうか？」

「ああ・・・俺もここにはいない方がいい気がする」

私達が部屋に戻ると何とも言えない空気が流れていた。いや、何か望月と樹以外の3人が面白い事を考えたような顔になっていた。多分、それを試すのは私達なんだろう。だってむっちゃ見られてるし？扉を開けた瞬間、2人で言葉を交わし素早く扉を閉め、ベランダに非難した。後から、3人が追つてきたから逃げて正解だったと思う。

「あのまま部屋の中に入つてたら絶対何かされてたよね」

「逃げて正解だな。それよりも・・・弟君、強烈だな」

「まあそうだよね・・・桂木君はさ、一昨日の事聞かないの？」

一昨日。それは私の過去を知った日。桂木君は疑問に思っているだろう。なのに全然その話をしなかった。いつもど通りに接してくれた。

「笹原さん、聞いて欲しくなさそうだったから。だからあの時、1人で帰ったんだろ？」

「うん・・・桂木君は聞きたい？」

「俺は・・・正直、聞きたい。笹原さんがどんな辛い思いをして来たのかを。でも俺は、笹原さんに無理には話して欲しくない。俺には話せるって思った時に話して欲しい」

ああ、何か泣きなくなってきた。桂木君が真剣な目で、優しい目で私を見るから私は桂木君に全部話そうと思ったんだろう。私が聞いてくれると聞くと桂木君はコクンと頷いた。

「私の家は結構な貧乏だった。それでもお母さんが頑張ってたし、私はそれなりに楽しかった。でも、その生活は私の父親である人が借金を作って帰って来た日から壊れたんだ。お母さんは一生懸命働いてるのにお父さんは働こうとしなかった。それから数カ月後、お父さんは借金を残したまま・・・逃げた」

「・・・」

桂木君は最後の言葉に驚きながらも黙って私の話を聞いていく。

「お母さんはそんなお父さんに絶望を感じながらもお父さんが残した借金を返済した。けど、今まで働いてきたから、よくお酒を飲むようになった。1日中家の中でお酒を飲んで、私に暴力を振るうようになった。最初は今は気持ちが落ち着いていないんだ。私が我慢すればお母さんは元に戻ってくれる。そう考えて耐えていた。それから3年が過ぎて私は2年生になりよく喋るようになった。それなりに友達も出来たし、お母さんにも自分の意思が言えるようになった。お母さんは自分が暴力を振るっているのをばらされると思ったのかある日、私の前から・・・消えた。確か私の誕生日の前の日かな。その時私は、ああ、捨てられたんだって気持ちでいっぱい結構荒れてイジメを受けるようになった。『捨てられた子』と言われる。それから1年は施設で暮らして3年生の最後、ここの養子にな

「つたんだ」

私はすべてを話した。大樹も私と血が繋がってない事くらい知ってる。でも、本当の姉のようにしてくれてる大樹の気持ちが嬉しかった。恭輔とお母さん（今のね）が引き取ってくれた時に知り合ったし。この前は昔とかいったけど産まれた時から知ってるわけじゃない。でも、皆私と仲良くしてくれる。それがとっても嬉しかった。

「これが私の過去の話だよ」

「・・・何で泣かないの？そんな悲しい顔してるのに」

ビックリした。前に晴菜にこの話をした時はそんな事聞かれなかった。ただ、慰めてくれただけだった。だって私は人前では泣けないから（樹は例外）。だからそんな事をハッキリ言われてビックリした。

「泣きたい時に泣けばいい。人前で泣けないならせめて・・・俺の前では泣け」

また、真剣な目で言う桂木君。もうホント・・・この目には逆らえないよ。自分の素直な気持ちが出てしまう。そう思った瞬間に頬に冷たいものが流れた。桂木がそっと抱きしめてくれて、どうやって涙を止めればいいのか分からない私は暫く桂木君の胸で泣いた。暫くして涙が止まり、私はどうも眠たくなってきた。うとうとしはじめて私に気付いたのか、桂木君はオヤスミと言ってくれたので私はそのまま眠りについた。

11（前書き）

圭太視線だからもの凄い短いです！

玲が寝たその後の圭太の考えです

——圭太視線——

笹原さんが寝てから暫く俺は、眠っている笹原さんを抱きしめていた。それでさつき思ったんだが・・・この状況不味くないか？いや、何が不味いのかって俺が。考えてみる。好きな女が自分に抱きついて寝てるんだぞ？色々不味いだよ！！彼女は俺の事友達くらいにしか思っていないだろうし。・・・ん？もしかしてこの状態の笹原さんを部屋に連れて行くのも俺なのか！？いや、俺しかないだろうな！！そう考えていた俺はベランダ近くにいる人物に気付かなかった。

「・・・何してんの？」

「おお！助けて下さい！弟君！」

そこで現れたのは弟君。確か名前は・・・大樹君だったな。俺は結構焦っているし弟君が来てくれて助かったと思っている！！

「いやなんで助けて？つか姉ちゃん？」

「ああ、笹原さんなら寝てるよ。所で笹原さんを部屋まで連れて行ってくれないかな？」

「何で俺？俺より圭太、さんの方がいいんじゃない？」

あれ？今、明らかさんっての忘れてたな。彼は基本的に呼び捨ての方がいいだろうけど笹原さんがさん付けしなさいとか言ってたからそのせいだろうか。

「圭太でいいよ。その方が呼びやすいんだろう?。」

「うん。姉ちゃんが怖いからさ。そういうのに。俺も大樹でいい。ところで俺多分運べない」

「えっ！何で!？」

「シャツの後ろ」

そういわれて自分の後ろの方を見る。・・・しっかりとシャツを掴んでますね、笹原さん！これじゃあ俺から離せないんじゃ・・・。試しに俺と笹原さんの体を離してみる。・・・無理でした。どうしても離れません。最悪だ。いくらなんでも離れようよ!!

「流石にそうなってる以上俺は運べないよ。しかも多分部屋に帰ったら、光輝と奈菜と晴菜にからかわれるぞ」

「うわぁ・・・あいつらの目の前でこれは無理だ!どうしよう・・・」

俺はあいつらに散々酷い目に合わされたので、こんな状態を見せたら面白がってからかってくるに違いない!!そうなれば俺は地獄を味わう事になる。

「俺と部屋変わる?俺、自分の部屋だし。姉ちゃんと部屋一緒だから」

「おお！それは助かる！ありがとう！そういえば大樹君。笹原さんの誕生日っていつ?」

「姉ちゃんの？今月だよ。6月15日。明後日だ。俺はもうプレゼント用意したよ。圭太もちゃんと用意しなよ」

大樹君は余計な一言を残して俺達が寝るはずの部屋へと入っていった。笹原さんの誕生日、そんなに早いのか。うーん・・・明日は何かに連れて出るかな。多分午後になりそうだが。お母さんにも話しておかないとな。ま、とにかくどうしようかな。どこ行こう。出来れば笹原さんが1日を忘れられるような所がいいんだけどな。そうじゃないと意味がないし。ま、とりあえず先に笹原さんを部屋へ運ばないと。いくら6月だからとはいえ、ちよつと寒いし。俺は普通に笹原さんを姫抱きして部屋に入った。うう・・・寝顔超可愛い。あーヤバイな。早く寝ないと。

それから俺は暫く、俺にしがみ付いてる笹原さんを一生懸命見ないように努力しながら明日行く場所を決めた。勿論、これは俺が勝手に決めた事で笹原さんや他の人は知らない。が、明日は仕方ないだろう。無理やり出かけよう。そう決心した俺はいきなり睡魔に襲われ深い眠りへと落ちていった。

12 (前書き)

今回、短い(汗

「ふぁ・・・ん!？」

私が起こると誰かに抱きしめられてる感じがしたので私の少し上を見上げるとそこには桂木君の顔が・・・ん!？何か色々おかしいぞ!？何で桂木君!？・・・ああ、そうだ。昨日あのまま寝ちゃったんだった。でも・・・この状態はおかしいよね!？私は何とか抜け出そうとしてジタバタしてみる。が、抜け出すことは出来ず。

「桂木くーん。起きて下さーい!ダメだ。全然起きない・・・」

諦めた私は大人しく今の状況を整理した。昨日、桂木君に色々ぶちまけてすっきりした私は急に眠気に襲われてそれでそのまま寝ちゃったんだったつけ。それにしても何で私のベットなんだろう?あのデッカイ部屋じゃなくて。まあ・・・桂木君が起きたら聞こつと。

「それにしても、桂木君っていつ起きるんだろ?うーん・・・」

「・・・起きました」

私はその瞬間、体がビクツとなった。だってもの凄い突然なんだもん。そりゃビックリするでしょ。私は桂木君に挨拶してそれから昨日、私が寝た後に起こった事を聞いた。

「うわぁ・・・ゴメンね!何か安心したから掴んじゃってたんだ」

「いやいいよ。何もなかったし。それより今日って別に予定とかないよね?」

「うん。ないよ」

「じゃあ、笹原さんって何処に行きたいところとかない？」

行きたいところ、ねえ・・・うーん・・・そうだなーいきなり言われても思いつかないなあ。うーん・・・私が出した答えは結局、いつも行く遊園地とかゲーセンとかだった。

「本当にゲーセンとかでいいの？」

「うん。その方が桂木君も楽しいでしょ？」

「・・・はあ」

桂木君は私を数秒見た後、もの凄い深いため息をついた。あー幸せが・・・って何でため息？私なんかいけない事でも言ったかな？私が一人で悩んでいると桂木君は私の目を真剣に見て言った。

「俺は笹原さんが楽しめる所がいいの。今日は笹原さんの為に出掛けるんだから」

そういつてニツと笑う桂木君。うん。私は素直にそう言っていた。桂木君のその笑顔に負けた。何か私って桂木君のほんとにグラッと来てない？何で？？私は分からないまま何故か桂木君に流されていった。結局、行く場所が決まらないまま私達は皆のいる部屋に向かった。

「ああ・・・大樹が・・・」

私が部屋に入った瞬間、目に入っただのは寝相の悪い氷室に蹴られて苦しそうに眠っている大樹の姿だった。氷室は幸せそうに寝ている。

「・・・大樹君を別の部屋に運ぼうか」

「うん、うん！」

私がオロオロしていると桂木君がそういつて大樹を運んでくれた。

あ、安心だぁ・・・というか氷室、寝相悪すぎじゃん。うわぁ・・・望月も可哀想だ。そう思った私は氷室を端っこにやろうと足を引っ張った。

「お、重い！」

私が引っ張っただけではちよつとしか動かなかった。悔しいけど以外に氷室には力があつたことが分かった。何か悔しい・・・！！私は一生懸命、氷室の足を引っ張っていたけど全然動かなくて途中で引っ張るのを止めた。その時、私の背後で物音がした。

「・・・何してるの？」

「あ、桂木君。今ね、氷室に蹴られてる望月が可哀想だったから氷室をどうかそうと思っただけど重くて無理だった」

私がそうやって苦笑いを浮かべると桂木君はむっとした表情から苦笑いに変わった。何でむっとしてたのかは分かんないけど苦笑いした桂木君は氷室をどかして布団をかけた。その間私は壁にもたれてそれを見ていた。

「それにしても皆良く寝てるねー」

「まあ昨日、遅くまで起きてたんだろうな。しかし、光輝の寝相が異常に悪いな」

そういつて笑う桂木君。確かにと私も笑う。皆に比べて氷室の寝相は異常に悪い。一人だけあちこちに行ってるしさ。他の4人はそんなに寝相は悪くない。何で氷室だけ・・・そう思うとまた笑ってしまった。それから私と桂木君は色んな事を話した。氷室達の事や、桂木君の友達の話。それと、好きなアーティストや趣味が一緒だったから今度、桂木君と私でお互い持っていないCDを交換しようと約束した。気がつくとダイブ時間が経っていて、昼になっていた。私と桂木君はそれぞれ起こしにかかった。

「晴菜！起きてー！奈菜も！」

「サムっ！！」

「イタっ！！」

私は寒がりの晴菜の布団を剥ぎ、奈菜の頭を叩いた。ちょっと奈菜の方に力が入った気がするけど多分、気のせいだー！こうして起きた2人に私は長い説教をされた。起こしたただけなんだけど・・・私は説教が終わり、朝食ならぬ昼食を食べていた。

12（後書き）

何か締まらない・・・

キャラ紹介

作「どもー！作者の耶麻です！」

玲「どうも。主人公の笹原玲です」

作「何とですね！読者様からキャラが増えすぎて覚えられないという感想を頂きました！」

玲「ああ、確かに増えたよね。一気に出しすぎだよ」

作「うっ！仕方ないじゃん！話が進むのには必要だったんだよー！」

玲「はいはい。では話が進まないので紹介へどうぞ」

作「流された・・・」

ささきはら れい
笹原玲

身長160cm 体重（書いたら逝けと笑顔で言われたのでやめま
す・・・） 16歳 女

その名前と初対面の人に対する態度からよく冷めてると思われがち。
玲をよく知る友達からは信頼されている。とくに親友の晴菜から。

5歳〜8歳の三年間、母親に虐待を受け一年間施設で暮らし、今住
んでる笹原家の養子になった。

容姿は普通の女子よりか全然いい。

噂では冷めてると言われるけど玲を好きな人は結構いる。本人はそ
んな自覚なし。

髪の高さは肩にかかる位で髪色は黒が強いこげ茶。

人の恋愛には鋭いくせに自分の恋愛には鈍い（っ）と玲の友人達皆は
言います）

性格はとにかくめんどくさがり。だけど、基本何でも努力する。

ただ、それは興味のある事だけで、興味の無い物にはほとんど何も
しない。

好きな物は頑張って嫌いな物には手をつけず、な超自由人。基本何

でも気分次第。

かつらぎけいた
桂木圭太

身長174cm 体重64kg 16歳 男

誰にでも明るく接し最近、人気が上がってきた人物。

基本は笑顔。余り、笑顔以外は見せない。

玲の事が好き。素直で、唯一玲がぐらつて来る人。

容姿はそこそこイケメン。自分は人気だという自覚はない。

多分、周りに凄いてもてている人が2人もいるからだと思う。

髪の色は耳にかかる位でそこまで長くない。髪色は黒っぽい茶色。

性格は何事でもしっかりしている。何にでも真剣に取り組み、先生達からの信頼は抜群。

困っている人はほつとけない、親切な人。

こむらはるな
小村晴菜

身長159cm 体重（玲と同じようなことになったので・・・）

16歳 女

玲の親友。小学校の頃からの付き合いで、小4の頃玲に例の過去の話を聞いた。

実は1番玲の事をよく見ていて、玲の様子がおかしかったら真っ先に声をかけるのは晴菜。

望月が好きで人のコイバナ大好き。

容姿は可愛くて、男女ともに人気。けど、望月の事を好きだと皆知っているから手は出さない。

髪の色は腰くらいで髪色は少し明るめの茶色。

性格は明るく、クラスを中心に支えている感じ。何でも頑張れば楽しくなる！と考えている。

色々な所で努力している努力人。

望月奏 もちづきそう

身長176cm 体重65kg 16歳 男

圭太の友達。学年一もてていて男子には普通に喋るが女子には照れるのか無口。

慣れてきたら普通に喋れる。望月は無口でも絵になるので女子にはモテモテ。

実は晴菜の事が大好き。

容姿はイケメン。髪の長さは圭太よりも短い。髪色は少しだけ茶色が入った黒。黒の方が多い。

性格は基本誰にでも優しい。皆に対等の優しさで、本音は信頼している人物にしか見せない。

成績もよく、生徒達からの評判も良いため先生達からは絶大な信頼を受けている。

勉強とサッカーを両立している凄い人。

玲「ちよつと作者。まだ4人しか紹介してないよ？」

作「キャラが多いんだよー!!」

玲「しかも、望月の最後『凄い人』って書いてあるし。これってただ考えるのがめんどくさくなっただけでしょ？」

作「ち、違っよ!ただ、良い言葉が浮び上がらなかつたんだよ!」

玲「どうだか・・・」

作「さ、さて!そんな事よりこの他の人はまた近々紹介しますので!でわさよーならー!」

玲「こんなので申し訳ありません。読者の皆様。こんな作品ですがよろしく願います」

作「あれ?何かそれ私が言わないといけないような・・・ま、いつか!」

玲「どうやら、作者は私よりも自由人なようです」

キャラ紹介（後書き）

作「さて、次回は・・・何があるかお楽しみ！」

玲「おもいつき考えていなかった時の発言だよね」

作「えー？何を言ってるのか私にはまったくわかんない！」

玲「つとというか作者。早く次のキャラ紹介書ないと読者様がキャラを憶えられないんだからね」

作「・・・私には今、早くキャラ紹介書けやって聞こえたよ、玲・・・」

玲「さー？何の事だろうね？では、皆様」

作・玲「次回をお楽しみにー！！」

13 (前書き)

今回超短いです。

昼食を食べ終わって。なぜか私と桂木君だけ出掛ける事になった。しかも行き先を決めないまま。私は基本無計画だから良いんだけど桂木君は絶対計画立てる方って印象でしょ？だから良いのかなーとか思ってたわけ。そうやって桂木君に聞くと俺も基本無計画だよって言われた。以外でしょ？私達は行き先を決めてないから散歩みたいにブラブラしようって事になった。

「じゃあ、この次の次くらいの駅で降りようか。あそこは自然が多いし、景色がいい所がいっぱいあるから」

「うん。いーよ。景色見ながらお茶しよう！カフェあるかな？」

みたいな会話をしているとその駅についた。初めはそこらへんをブラブラして、暫くしてから近くのカフェへと入る。そして私達は大好きなアーティストの話をしたり友達の話をしたりした。（朝とは違う話だよ）
そして大分時間が経って。

「桂木君！次、遊園地行こうか」

「遊園地？でもこの前行ったばかりだよ？」

「うん。でもまだ回ってないのもあるし、また行こうって言ったし」

「じゃあいこっか」

こうして、私と桂木君は1時間半位、遊園地を回っていた。そして帰りの電車で私は不覚にも寝てしまった。だって、疲れたし、桂木君の傍に居ると安心するんだよ。そして私は自分の家のある駅まで爆睡していた。幸い涎はたらしていなかった。垂らしてたりしたら最悪と沈むところだったよ。こうして私は自分の駅で起こしてもらい桂木君と二人で私の家に帰った。

キャラ紹介 2

作「どもー！またまたキャラ紹介です！」

玲「この前のキャラ紹介から1話しか挟んでないけどね」

作「そ、そこは別にいいじゃん！って事でキャラ紹介へどうぞ！（やつと言えた・・・！）」

玲「・・・心の声丸聞こえ（ぼそ）」

かとうきょうすけ
加藤恭輔

身長175cm 体重65kg 16歳 男

男友達女友達ともに同じ数位の見た目はいいいけどモテはしない男。人気がない訳じゃないけどどっちかと言うと紹介人みたいな事をしている為、全くもてない。

玲とは幼馴染で、お互いの両親が仲良し。玲の弟、大樹には無茶苦茶、嫌われている。その原因は不明。

容姿はイケメン。よく、彼女や彼氏が出来る為に利用されてる人。

髪は圭太より少し短い位。色は少し明るめの黒。

性格は明るく、友達が良く出来そうな明るい性格。正し、彼女は出来ない。

ながともしゅんや
永友俊哉

身長180cm 体重69kg 17歳 男

玲と恭助が所属している演劇部の部長。じゃんけんで負けて部長に基本、適当な部分があり、そういう所で彼女にフられる。でも、友達から頼りにされている。

容姿はイケメンと普通の間くらい。

髪は少し長めで前髪をいつもくくっている。色は赤が混じった茶色。性格は先程も言ったとおり適当。でもやらなければいけないところではきちんとする。

ささはらだいき
笹原大樹

身長155cm 体重48kg 13歳 男

玲の義弟で玲の事を本当の姉と認識して暮らしている。

大機からすれば恭助↓敵 樹↓敵 圭太↓見方（好印象）となる。

何故、圭太だけが敵視されていないかは不明。

容姿は男の子だけど女の子みたいな顔をしていて可愛い。

髪は1番長い所で首まで伸びている。色は明るい茶色。

性格は外見に似合わずハツキリしている。嫌いな物は嫌い。好きな

物は好き。

良く分かる例が玲と恭助。

玲「また少ないし」

作「勘弁してください！頑張ったんだよ！？」

玲「まあ別にいいけど。というか作者。前から気になってただけど・・・」

作「何？」

玲「もう2人忘れてない？大事な人。大樹とかを紹介する前に先この人を紹介しておいた方がいいと思うんだけど」

作「んん？・・・あ」

玲「・・・氷室と樹ね」

作「ああー！！！！忘れてた！！・・・ま、まあ次、書けばいいよね！？」

玲「いや、私に聞かれても・・・」

作「つ、次、必ず書きます！で、ではこの辺で！」

玲「逃げた」

キャラ紹介 2（後書き）

光「何で俺忘れられてんだよ・・・」

樹「俺結構存在感、あると思ってたんだけどな・・・」

玲「いや、2人はただ単に作者が忘れてただけだと思うよ？」

光「だよなあ。それしか考えられないな」

樹「で、作者は？」

玲「・・・ビシ（右を指差す）」

光・樹「作者ーーーー！！！！」

作「ご、ゴメーーーーーン！！！！」

玲「・・・お騒がせしました。次回の事は作者にしか分かりません
が次回もお楽しみ下さい。では、また次回、お会いしましょう」

作「勝手にしめないでーーーー！！！！」

14（前書き）

特に何の進展もしない回ですww

玲が珍しく寝坊するとうちよつとした小話。
もの凄い短いですよ・・・

朝、私は目覚ましの音で目が覚めた。・・・今、時間がやばいんですけど！？私は急いで制服に着替え、リビングに降り、お母さんに挨拶し、朝ごはんを食べずに家を出た。いや、食べてる暇なんてないから！私が全力で走った結果、遅刻は免れたが大変な事が起こった。それは・・・

「お、お腹減った・・・」

私は毎朝ちゃんと朝ごはんを食べる人なので食べ忘れると空腹感がハンパない。しかも昼間で待たないといけないし・・・色々と限界が近くなつて来るわけです。主にお腹の！まあとりあえず私はポケットに入れてきたガムを口に含む。ばれちゃダメだけど・・・匂いしないし大丈夫でしょ。

「——であるから」

私は授業を聞かずに教科書を見る振りをして本を読んだ。いや、授業ってつまらないし、普通に寝てる人とかいるから。その人たちに比べたらマシ。ちなみにちよこちよこ黒板見て話し聞いているから当てられても問題ない。無事ばれずに授業が終わり、休み時間になる。ってこんな感じに時間は過ぎていきとうとうお昼。午前中最後の授業が終わると私は鞆を持ち、屋上へ向かう。そして屋上の隅にあるベンチに座って弁当を広げる。やっと食べれる・・・！

「いただきます！」

私はそういいおかずとご飯を交互に食べていく。あー空腹が満たさ

れていくー！弁当を全て食べ終わる頃には私のお腹は満腹になっていた満腹になった私は時計を見る。時計の針は昼休みの丁度半分を指していた。

「早く食べ過ぎたかも」

そう思った私は少し屋上でゆっくりする事にした。特に何もする事もなく時間は過ぎていき、昼休みが終わる10分前になっていた。私は立ち上がり、屋上のドアを開ける。そして階段を降りていき、暇な授業が始まる教室へと入っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2574u/>

友達と私

2011年11月13日12時37分発行